

まんようしゅう わじん
万葉集と倭人たち

1 序

人間の性格や考え方の傾向を、その人の“人間性”とっておきます。

“人間性”は“人間として最も大切な**人間の本質**”であって、個人にも、民族という集団にも存在するものです。

“人間性”は、持って生まれた先天的資質と、与えられた環境や体験の両方に依って作り上げられると考えられますが、特に先天的資質は重要です。

先天的資質が重要なのは、似たような環境に置かれたり似たような体験をしても、その環境や体験から何を学び、どのような結論を得てどのような人間性の人になるかは、それぞれの人の、持って生まれた先天的資質によって大きく違ってくるといふ事実があるからです。

『倭人』^{わじん}というのは、日本人の祖先の呼び名ですが、その「倭人の血（遺伝子）」は子々孫々に引き継がれ、現代に生きる私たち日本人の中に脈々と流れています。ですから「倭人たち」がどのような人々であったかを知ることは、日本人が本来どのような資質を持ち合わせた人間であるかを知ることにつながります。

私達に備わった資質を明らかにすることができれば、その資質の上に私たちの歴史体験を重ねることで、現在の私達日本人の“人間性”すなわち日本人の性格や考え方の傾向が、より正しく、より明瞭に見えてくるでしょう。

ここでは、万葉集を通して知ることができる『倭人』について、すなわち私たち日本人に備わった資質について語ります。

万葉集を取り上げるのは、そこに収録されている和歌はもとより、万葉集の存在そのものからも、祖先の感性を感じ取れると思うからです。

2 万葉集

2.1 成立

万葉集が編纂されたのは、7世紀後半から8世紀後半にかけて（西暦759年頃に完成）と言われていました。

今からおよそ1200年以上も前に完成したことになりますが、長歌、短歌など合わせて約4500余首の和歌が全20巻に分けて収録されています。

このような形の歌集あるいは詩集は、世界中を見渡しても、中国の漢詩以外には、遠い過去から現在に至るまで唯の1点もありません。

日本には、後の時代に万葉集に似た形式の歌集がいくつもあります。古いところでは10世紀初め頃、紀貫之を中心に編纂された『古今和歌集』とか、13世紀に藤原定家によって撰抜された『小倉百人一首』とかが有名ですね。それらの作品のさきがけとなった、現存するものとしては最も古くて、しかも収録された作品の内容も大変優れた、いわば最高傑作が『万葉集』です。

このような形の歌集は日本ではそれほど珍しくないわけですが、先にも述べたように、似たような形式の文芸作品は「漢詩」を除けば他のどの国にも存在しません。では、なぜ他の国には、そういった形式の文芸作品が存在しないのでしょうか。

この疑問を解くには、こういった形の文芸作品が生まれるために必要な条件について考えてみるのが良いでしょう。それがとりもなおさず“民族性”すなわち“民族が持つ性格＝資質”について検討することになります。

2.2 内容と特徴

万葉集は「和歌」の作品集です。

「和歌」は明らかに中国の漢詩に倣ったものです。まずは漢詩を詠むことを学習し、それと同じことを日本語で、日本流のルールを定めて詠んだのが「和歌」です。和歌は形式によって「長歌」「短歌」「旋頭歌」などに分類されますが、最も完成した形式を持ち、今日でも親しまれているのは「短歌」でしょう。

※ちなみに、我が国における最も古い漢詩集は「懷風藻」で、「万葉集」

より少し前に完成しています。とまれ他国のすぐれた文化や技術^{うま}を上手くアレンジして取り込む能力の高さは、遠い古（いにしえ）から日本人に備わっていた資質の一つではないかと思えてなりません。たんなる模倣（コピー）で終わらせないのが日本人です。

“日本流のルール”というのは、「短歌」の場合だと、「五・七・五・七・七」の三十一音（三十一字＝みそひともじ）を基本として詠みあげることです。

先にも述べましたが、万葉集に収録されている和歌の数は4500首を越えます。その中には、上^{かみ}は天皇の御製、皇族の御方々がお詠みになられた和歌をはじめとして、貴族、上級官吏、優れた歌人の作が、そして下^{しも}は下級官吏・庶民に至るまでの様々な階層の人々の作品が、さしたる区別も無く収録されています。

そして万葉集の特徴の一つとして挙げられるのは、選者が明記されていないことです。また、御製に対しては当然ですが、のみならずすべての歌に対しても、評価文などは付されていないのも大きな特徴でしょう。これらのことから推察される事柄については、次の「倭人たち」の章でお話しします。

2.3 漢字

表記に使われた**文字**は「漢字」です。「漢字」は日本人が採用し、現在も使い続けている文字であり、また日本人の資質にも関わりがあることなので、少し詳しく解説します。

残念ながら我が国には、自分たちで固有の文字を創作し活用したという事実はなさそうです。漢字は古代の中国で考案されたものですが、その歴史は大変古く、紀元前1300年頃には既に実用に供されていたと考えられています。倭国の女王卑弥呼が3世紀半ばの人ですから、漢字の歴史の古さには驚嘆します。

さてその漢字ですが、当然のことながら漢字は当時の中国語を記述するために創られた文字です。

一文字が一つの事物や事象、あるいは行為等を表すいわゆる「表意文字」で、当然それらの文字には、それぞれの事物や事象、あるいは行為等を表現するための中国語の音（おん）があてられています。

当時の日本人は、この漢字を使って日本の言語を記述しようとしたのです。

中国語を表記するために創られた文字を使って、それとは表音も構文も全く

異なる言語である日本語を記述しようとする自体がかなり異常に思えますが、日本人はユニークな工夫を凝らすことによってこれに成功しました。

合理的に考えれば、文字の表記方法はシンプルほど良いにきまっています。例えばアルファベットなどは、たった26個の表音文字と少しの補助記号、そして少しのルールを定めることで、何の不自由もなくいろいろな言語を記述できています。大方の民族、ことに合理性や効率性を好む西欧人は例外なくこちらを選択しました。

アルファベットに限りませんが、合理性の点では、表音文字の方が表意文字よりがはるかに勝っています。表意文字である**漢字**は文字としては特異な存在だと言えるでしょう。なにしろ言葉の数だけ文字が用意されることになりすから覚えるのが大変で、非効率なこと、この上もありません。

中国人が何故漢字を考案したのかは私には良く解りませんが、漢字には捨てがたい利点があることも確かです。

私達の祖先が漢字を採用した理由の一つは、この漢字が持つ利点にあるのですが、私はそこに日本人の知的優秀性が表われていると思います。

2.4 人間性と言語と文字の関係

前節の続きになります。日本語と対照をなす英語を取り上げて、対比させながら話を進めましょう。

一言でいうと、英語はシンプルで紛れの無い明瞭な言語です。一人称は[I^{アイ}]、二人称は[You^{ユー}]。老いも若きも男も女も、誰が誰に対して使う場合もこれで良いのです。それに比べて、日本語はとてつもなく厄介です。

[雨]は英語の場合[rain]という単語を知っておけば大体用が足りませんが、日本語はそうはいきません。汎用的に使える[雨]の他に、[氷雨^{ひさめ}、霧雨^{きりさめ}、五月雨^{さみだれ}、夕立^{ゆうだち}、時雨^{しぐれ}……] あなたはいくつ思い浮かべられますか。

これは日本人が繊細な神経を持った情緒的な民族だということなのです。もちろんそれは長所でも有り、欠点でもあります。

漢字を捨てなかったのは、こういった自分たちの性格には、表音文字より表意文字の方が合うという判断があったからではないかと思うのですが、もしそうだとしたら中々鋭い感性です。

2.5 漢字の利点

ここで漢字の利点をみておきましょう。

漢字の最大の効用は、言語が違っていても文字に書き表せば意を伝えることが出来るという点にあります。これは表意文字ならではの利点で、表音文字には無い機能です。

言葉の数だけ漢字を用意するのは、作るのも覚えるのも大変に思えますが、そこは良く考えられていて、作りやすく覚えやすくするための作字のルールがあります。多くの漢字が偏へんと旁つくりの組み合わせで出来ていますが、偏によってその漢字が表す単語の種別が類推出来るようにつくられています。木偏きへんは木に関連する事物であることを、人偏にんべんは人に関する言葉であることを、といった様にです。

2.6 熟語

漢字は表意文字（一文字ごとに意味を持つ文字）なので、二つ以上の（多くは二つの）漢字をくみあわせて、新しい単語（熟語と言いますが）を作るという操作も、同じ趣旨のことを表音文字で行う場合に比べてはるかに容易です。

日本人は古来からこの漢字の優れた機能を大いに活用しました。

登山、読書、発見、集会所 等々の語は、本来の和語（日本語）には無い単語なので、和語で表わそうとするとどうしても長たらしい表現になってしまいます。

熟語には表現を短く端的にするという効能がありますが、しかし同時に“和製漢語”なので、次にお話しする「仮名」で表記するとかなり分かりにくいという欠点もあります。

発行はっこう、発効はっこう、発光はっこう 醜酵はっこう、薄幸はっこう とか 放棄ほうき、法規ほうき、蜂起ほうき、箒ほうき とか判読の苦勞が生じる場合も少なくありません。

2.7 仮名

日本語には中国語に無い「助詞」というものがあるために、表意文字である漢字だけで日本語を表記するには無理があります。

「助詞」は名詞や動詞、形容詞などの文法的な関係を示して日本語を成立させる働きをするものですが、「助詞」自体には固有の意味はありません。ですから

表意文字である漢字には、それ自体は意味を持たない「助詞」を表記するための文字は存在しないのです。

英語や中国語は、主語、述語、目的語などの位置・順序を定めておくことで、助詞がなくてもそれらの文法的な関係がわかるようになっています。

一方日本語は、主語、述語、目的語などの位置を色々に入れ替えたり、場合によっては省略しても、助詞の使い方次第で意味が通じるように出来た言語なのです。

もう一つは日本語の動詞や形容動詞に見られる“活用”の問題です。“流す”と“流れる”の違いを書き分けた漢字も、分けるための漢字も原則としてありません。

日本語に不可欠な助詞や“活用を表すための”文字が無いと和文（日本語の文章）は記述できないという問題には、当然最初から日本人は気づいていました。

和文を成立させるためには、どうしても表音文字による補助が必要なのです。そこで当時の日本人は、漢字のいくつかを表音文字として利用しようと考えました。万葉集より少し前の8世紀はじめ（西暦712年）に完成した古事記は、この発想に基づいて書かれています。

万葉集も同様の方法で記述されていますが、その中から有名な和歌一首を取り上げてみましょう。

茜草指武良前野逝標野行野守者不見哉君之袖布流 （原文）

次のように読みます。

あかねさす むらさきの ゆ しめの ゆ のもりはみずや きみがそでふる
茜草指 武良前野逝（き） 標野行（き） 野守者不見哉 君之袖布流
ぬかだのおおきみ
(額田王) 作歌

太字の個所が漢字の仮名的使用にあたります。これを、表意文字である漢字から“意”を取り去って、“音”^{おん}だけを借用しているので、普通「借字」といっています。「不見」の部分は中国文、いわゆる漢文の表記になっていて、“返り点”を打って読みます。

原文をそのまま読むのはかなり難しいですが、その原因は、それぞれの漢字が漢字本来の表意文字として使われているのか、それとも「借字」として利用されているのかを逐一判断しながら読まなければならないところにあります。

そこで読みやすくするための工夫が徐々になされていくのですが、そのスタートは万葉集の時代と考えられています。

そして現在の「平仮名」の原型である「草仮名」が見られる様になるのは10世紀の初め、ですから、スタートから言えばほぼ1世紀半という長い時間がかかっています。漢字と「借字」の混用を快適にするための工夫は、それだけ難しかったということでしょう。

ご承知のように、仮名には「片仮名」と「平かな」の二種類があります。

※片仮名は当初は訓読（漢文を直訳的に日本語文として読み下すこと）のための補助記号として作られたと考えられています。

仮名が当初の目的だけを充たせば良いと考えるなら、仮名は一種類あれば充分なはずですが。また仮名さえあれば、たとえ漢字を使わなくても日本語を表記出来るはずですが。

しかし私達の先人は、仮名を二種類も用意し、しかも漢字の使用も放棄しませんでした。

漢字の使用を放棄しなかったのは、それだけ漢字の効用が大きいということ、日本人は充分理解していたのです。漢字は言葉の意味をダイレクトに視認できる便利な文字であり、また漢字は熟語を迷い無く活用するためにも重要です。

かなと漢字の併用は今日まで受け継がれていますが、世界中を見渡しても表音文字と表意文字の併用はきわめて異例です。このあたりに日本人独特の思慮の深さを見ることができます。

先に取り上げた和歌をもう一度、ごく普通の現代表記で見てみましょう。

茜さす紫野行き標野行き 野守は見ずや君が袖振る

茜サス紫野行キ標野行キ 野守ハ見ズヤ君ガ袖振ル

片仮名交じり文より平かな交じり文の方がより読みやすいと思います。

それは、片仮名は字形が直線的でやや漢字に近いのに対して、平かなは字形が丸みを帯びた曲線によって作られているからでしょう。画数を少なくすると同時に、字形を丸みを帯びた曲線にすることによって視認性を高めているのが良く解ります。また平かなが持つ柔らかさは、穏やかな和語を表現するにもマッチしている気がします。

3 ^{わじん} 倭人

日本人について話せば、その殆どが他の人達との比較論になるのはやむを得ません。その場合つねに次のことに留意しましょう。すなわち、《文明が進んでいることは、必ずしもその文明が優れていることを意味しない》《文明が未開であることと野蛮とは同義ではない》という点です。

3.1 有史以前

日本人や日本列島に関する文書記録は、中国の歴史書『三国志』（3世紀末）まで待たなければなりません。それ以前のことは、主として考古学に基づく推量ということになります。

ところが近年になって急速に発展している遺伝子（DNA）の研究によって、従来の考古学では中々分からなかった多くのことが明らかになってきました。そこで横道にそれるかも知れませんが、分子遺伝学の話を少しだけします。

現在地球上に住んでいるすべての人類は、20～10万年前にアフリカに誕生した一人の女性から生まれた子孫が各地に拡散したものだそうです。これはミトコンドリアのDNAを解析することで世界中の人類集団の母系の系統が明らかになった結果です。

※次代に受け継がれるミトコンドリアのDNAは母親からのものに限られており、父親（精子）のミトコンドリアのDNAは排除されます。

これは人類が地球上の各地域に拡散していく歴史を知る上で大変重要な資料なのですが、私がさらに興味があるのは“父系”の系統です。

人間の男女を決定するのはY染色体ですが、これは父親から息子にだけ引き継がれます。女性にはY染色体がありません。したがってY染色体を調べれば父系の系統を知ることが出来ます。

実はこのY染色体DNAのハプログループとその民族が使っている言語との間には、かなりはっきりした相関関係が認められます。そしてこの二つを照合すると、多くの大事なことが分かるのです。

※ “ハプログループ” というのは、DNA の変異に基づいてグループ分けしたものと考えて良いでしょう。ミトコンドリアも Y 染色体もハプログループ分けすることで、人種の由来や系統を明らかにするのに役立ちます。

民族というのは単一の人種で構成されている場合もあるでしょうが、多くの場合は複数の人種によって構成された社会です。人種は様々でも同一の言語を使用していれば、その人達は同一民族と定義されます。

ですから日本人あるいは日本民族という場合、それは基本的に日本語を母語とする人たちの集団と考えて良いでしょう。

一つの^{みなもと}源から出発した人類は、各地に拡散しながら様々な人種へと分化を重ね、様々な民族を生み出していきました。同時に言語も様々に変化し多様化していきました。これらの多様な言語の系統（言語間の関係性）を研究する学問は“比較言語学”と言いますが、その比較言語学が語る興味深い事実を取り上げてみます。

言語の中には類型が、つまり関連性や似た要素が見当たらない個性的な言語があります。これを“孤立言語”と言います。古い時代に発生したまま、類型の言語に分化することが無かった（別の親戚民族を生じなかった）ということです。孤立言語の多くは、孤立した地域に暮らす小人口の人々が使用している場合が多いですが、中には大人数が使用している言語もあります。日本語と朝鮮語です。勿論、日本語と朝鮮語はそれぞれが孤立語で、相互の間には殆ど関連性は認められません。かなり遠い昔から別の民族だったといえます。（異民族間の接触や交流によって類似語等が現れる事があります。）

※言語の発生は人間集団の発生とほぼ時を同じくするでしょう。

近隣の諸国、とくにアフリカを出てから日本（現在の日本列島）にたどり着くまでに必ず経由しなければならなかったはずの経由地のどこにも日本語のルーツが見出せないというのはかなり重要です。

それはつまり、日本語の祖語（もととなる古い言語）を使った人々が主体となるような民族が、かつて存在したとしても、彼らは他の地域では現在まで存続できなかったことを意味します。

そしてこのことは、Y 染色体 DNA で見る日本人の特徴と良く符合します。Y 染色体のハプログループの系統図は祖先を A として、DNA 変異が起きた順に、

B、C、D、E……R というふうに名付けられています。

それぞれのハプログループは、更にいくつかのサブグループに分立し、そのハプログループの構成割合の違いが、各地に存在する民族の気質や人間性を複雑に変えています。

近隣諸国を含むアジア、特に北東アジアに住む民族に多いハプログループは、D と O ですが、その殆どは日本とチベットに集中しています。ことに D グループのサブグループである D1b は、日本にしか見られない個性的な DNA 型です。

ちなみにチベットに多いのは D1a、朝鮮半島、中国は O が圧倒的多数を占めます。おそらく朝鮮半島、中国では先住の D 型は後から登場した O 型によって、隅に追いやられたのでしょう。生存力では O 型の方が勝っていたのだと思われま

DNA の話はこのあたりでひとまず置いて、『倭人』に戻ります。

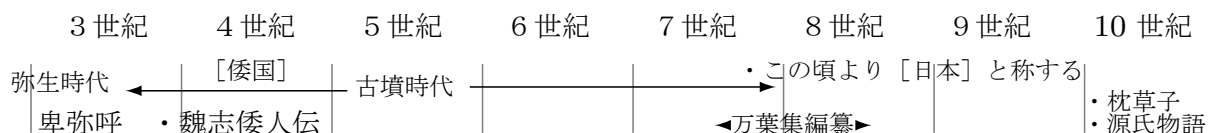
3.2 魏志倭人伝

「倭人在帶方東南大海之中 ……」

これは 3 世紀末、西晋の陳寿によって書かれた『三国志』の中の、「魏書 … 東夷伝倭人条」通称『魏志倭人伝』で知られる記録文の書き出しです。

※「帶方」は、3 世紀に古代中国が朝鮮半島西部に置いた地方拠点「帶方郡」のこと。

3 世紀末と言えは我が国では『卑弥呼』(～3 世紀中葉)のすぐ後の時代です。その頃記述された漢文(中国語)の意を、今の私たち日本人が難なく読み解けるのは、まさに漢字の威力です。



当時の日本列島にはまだ国家と言える程に統一された体制社会は無く、小さな部族集団が部族集団ごとに生活している状態だったようです。そのため「倭国」とは言わず「倭人」と表現したのでしょう。「倭」という漢字は、「従順な」

とか「礼儀正しい」といった意味を持ちます。これが文化的に大きく先行していた中国の人達の「倭人」に対する初印象だったと考えて良いと思います。

倭人の「従順」についてはこの後で話しますが、ここには倭人伝の中の次の一節だけ記しておきます。

「其會同坐起 父子男女無別 人性嗜酒」

文意（会合での立ち居振る舞いに 父子男女間の差別は無い 酒を^{たしな}嗜む性質である）

DNA 学的に弥生人（渡来人）は酒に弱く、縄文人（先住民）は酒に強いと言われていいますので、この時代にはまだまだ縄文人の血を引く人達が優勢だったのかも知れません。

3.3 和の心と信仰心

（続）